

美点入れ替えのクリーム



私はまだ行ける――。
そう思うようになったのは20代も後半になってからだ。

「いらっしゃいませー」



その頃に行動すればよかった。
その頃にはまだ行けていたのだ。
その事に気づいたのは30代前半になってからだ。

道子
「試着室はあちらになります」

モテる、というほどのものではなかったかもしれない。
それでも、男性経験がないわけではない。

特定の相手はなんだかんだと途切れずにいたし、そうでなくても口説かれることは多かったように思う。
そんな環境にいたからだろうか。
焦っていなかったのかもしれない。

道子
「子供服売り場はあちらになります」

お母さん
「ありがとうございます。ほら、あなたも」

子ども
「ありがとう、おばちゃん」

そう言われる年齢になった。



思えば、私は特別目立つ容姿をしていたわけではない。
目立ちもせず、かといって埋もれてもいない、ちょうど絶妙な容姿だったのだろう。

顔も、スタイルも、普通よりはちょっと上だったのはもう過去のことだ。
今はもう見る影もない。

同僚
「どうしたの、道子さん。あのお客様、知り合い？」

道子
「ううん、そういうわけじゃないんだけど」

同僚
「道子さんよくそうやってお客様見てること多いわよ」

道子
「そう？ なんだか、若いっていいなあって」

同僚
「私達にもあんな頃があったのよねえ」

道子
「ねえ」

同僚との会話を適当に流して、売り場の見回りをするふりをして客を見る。

いつからか、客を見て「もし自分があの容姿だったら」と想像することが多くなった。

決まってティーンの、若い若い客ばかりだ。

そんな若い子たちを追いかけてまわしているのが恥ずかしくて、それでもつい目で追ってしまう。
もしあの肌が、あの骨格が、あのスタイルが今の私にあれば、と。

私達にもあんな頃があったー。
そう簡単に流せないほどに、私の若さへの執念は深かった。

あの若ささえあれば、あの体さえあれば私は今でもいけるのだ。

輝くことができるのだ。私は今でも遅くは無いのだ。

だから今になって思うのだ。

あの肌は、体は、心は、若さという武器はかけがえのないものであり、決して安売りするべきものではなかったのだと。

今の若い子たちは、今若いさなかにある子たちはその価値に気づけないのだ。
その価値を真に生かすことができるのは私なのに、私にこそその価値が必要なのに。

同僚
「道子さん、裾上げお願いします」

道子
「はい、いきます」

きゃっきゃと笑いながら服を選ぶ子たちを尻目に、私はバックヤードへと下がる。

もしあの子達と私の体が入れ替わったのなら。
どんなに嬉しいことだろうか。

同僚

「道子さん。どうかしたの？」

道子

「えっ？」

同僚

「なんか心ここにあらずって感じ。どうしたの？」

道子

「いや、別に。大丈夫」

私の意識はここ数日、常にポケットの中にあった。

老婦人

「これはね。相手の塗った場所と自分の場所を取り替えられる薬なの」

喫茶店で偶然相席になった老婦人は、小さな軟膏を取り出してそう言った。

老婦人

「私の顔、綺麗でしょう？」

道子

「……はい」

老婦人

「これはね、町中の美人からかき集めたもののよ」

ブルーマウンテンとクリームソーダに定評のある純喫茶。

店内には洒落た音楽が流れ、所狭しと観葉植物が茂っている。

ダークブラウンのフレームにクリーム色のクッションの椅子から身体を浮かせ、私は前のめりになって話を聞いた。

老婦人

「この鼻はね。町に来た歌手からもらったもの。この手は宝飾店勤務の女の子のもの。今はしぼんでしまったけれど、胸は学年一番の巨乳の子からもらったものよ」

失礼になるだなんて考えもしなかった。

私はただただ老婦人の身体のパーツを食い入るように見つめた。

どれも端正で、整っていて、美人の良いところをかき集めたというにふさわしい造形をしている。

老婦人

「あなたは困っていそう。だからこの薬をあげるわ」

道子

「あげる……」

老婦人

「そう、私はもう十分女を謳歌したもの」



軟膏が、目の前のテーブル中央に置かれる。

何の変哲もない、ピンク色のケースに入れられたそれはどう見ても特別なものには思えない。

老婦人

「疑っていますね」

道子

「……はい」

老婦人

「試してご覧なさい。これはもうあなたのもの——手を出して」

私は手を差し出す。

老婦人は私の手を手に取り、ゆっくりとした手つきで軟膏を握らせた。

老婦人

「これは、あなたを魅力的な女にしてくれるものよ。これがあれば、あなたは世界で一番魅力的な女になれるわ」

同僚

「道子さん？」

道子

「あっ、ごめんなさい。私またぼーっとして……」

同僚

「さっきからポケットに手を入れてるけど、何が入ってるのよ」

道子

「えっ、あ、本当だ」

ポケットの中で軟膏を転がしていることに自分でも気づかなかった。

道子

「新しいリップクリームを買ったから、つい触っちゃうの」

同僚

「へー、見せてよ」

道子

「だめ、安物だから恥ずかしいの」

同僚

「そっか。まあいいけど」

同僚は興味を失ったらしく、売り場に戻った。

指先で軟膏を転がしながら、客のまばらな店内を見渡す。

軟膏が本物かどうか、試してみないとわからない。

でも試してみて嘘だったら？

何の効果もなかったら？

その時のショックは計り知れないだろう。

だからこそ、さほど期待しない相手がいい。

ターゲットと二人きりになって肌を見られる場所、この売り場においては――試着室だ。

きっかけは些細なことだった。

服を買うついでに採寸をして欲しいという客と一緒に試着室に入り、下着姿になってもらったときに気づいたことだ。

道子

「あら、ここ赤くなってますね」

女の子

「そうなんです。虫にでも刺されたかなあと思って」

柔らかな、女らしい丸みを帯びた身体を持った女性。

大学生くらいだろうか。

若さのまっただ中を生きる彼女にとって、ウエストの数値はきっと死活問題なのだろう。

メジャーを回したとき、息を吐ききるようにして努力をしてみせる彼女はとてもかわいらしい。そしてとても羨ましくもあった。

揺れるキャミソールの裾、チラチラと赤くなっている箇所が覗く。
虫刺され、というよりは擦れてかゆくなったような感じだ。

道子

「はい、測れましたよ」

女の子

「ありがとうございます」

彼女から離れると、その右手は自然と赤みへ伸びる。
ぽりぽりぽり。爪を立てて掻く音が試着室に響く。

道子

「かゆいんですね」

女の子

「はははっ、そうなんです。恥ずかしいなあ」

彼女は私に背を向け、脱いでおいた服に手をかける。

ジーパンを履き、トップスを着ようとしたとき、私はハッとした。

道子

「ちょっと待って」

女の子

「はい？」

道子

「そこ、薬塗ってあげるわ」

女の子
「え、でも……」

ポケットから例の軟膏を取り出す。

散々ポケットの中で転がして手垢まみれになったそれは、一見どこにでもある軟膏ケースだ。

道子
「これはね、保湿剤なの。掻くとひどくなってしまうから、保湿しておいた方が良いわ」

女の子
「でも、あと家に帰るだけだしなあ」

道子
「若いんだから肌はいたわらないとダメよ。私くらいの歳になると、かき傷の痕が目立ってみつともなく見えるんだから」

私の熱量に、どこか異常さを感じ取っているのかもしれない。

それでもいい。
そんなことは関係ない。

私の意識はただ、目の前の女に軟膏を塗りたくることだけにあった。

道子
「ほら、お腹出して」

女の子
「……はい」

道子
「もう少し上げて、全体的に保湿しておくわ」

保湿を口実に、私は名前も知らない若い子の腹に例の軟膏を塗りたくった。

道子
「はい、これでいいわ」

女の子
「……ありがとうございます」

彼女は自身のスリーサイズを書いたメモを手売り場へ消えていった。

今のところ変化は見られない。

私を訝しむ様子はあったけれど、軟膏の効果は見られなかった。

劇的な変化はなく、まさか偽物だったんじゃないかと思って、あの軟膏にはなにも効果がなくて、私はただ客にワセリンのような物を塗っただけの女になったんじゃないかと思って、そわそわした。

効果が現れたのは、日付が変わってからだ。

結論から言うと、例の軟膏は本物だった。

手で腹部に触れるとそこにあったのは、キメの細やかなハリのある肌だった。

脂肪を蓄えた下腹も、たるんでみっともない肌質も、見た目の悪かったへその穴さえも全てが変わっていた。

鏡を前に、私はつい腹を撫でる。



道子
「綺麗……」

だが服を全て脱いでみると、かえって醜さが際立った。

若いパーツと入れ替わったのは腹部だけの話で、胸から腰にかけては寸胴体型のままだ。やや垂れ下がった肉達の醜さが強調され、むしろ嫌な気分になった。

道子
「もっと……もっと……」

軟膏を手に取り、残量を確認する。
多いのか少ないのかわからないが、昨日使ったにしておいては大して減っていないように見えた。

道子
「いらっしやいませ」

常連客の母親
「お世話になります、道子さん」

道子
「今日は娘さんとご一緒なんですね」

常連客の母親
「そうなんです」

昼下がり、常連客が訪れた。
普段は母親だけだが、今日は娘と一緒に。



まだ学生だろうか？
若く、ハリのある肌だ。
何より服を大きく持ち上げる胸元が、女らしさを強調している。

道子
「今日はどうされましたか？」

常連客の母親
「娘の下着をお願いしたくて」

道子
「はい、かしこまりました。サイズはお決まりですか？」

常連客の母親
「いえ、今までのがきつくなったっていうんです。申し訳ないんですけど、測ってもらえますか？」

”きつくなった”のくだりで少しいつむき顔を赤くする辺り、まだまだ情緒は幼いのだろう。
その大きさが将来自身の武器になることを、彼女は気づいているのだろうか。

道子
「かしこまりました。それではお嬢さん、試着室へどうぞ」

アイドルを目指す少女

「はい」



堅さと柔らかさの両立された美しい身体だった。

とりわけ胸の造形は素晴らしいの一言に尽きた。
理想的な形、ハリ、乳首や乳輪の形、色、女を謳歌するにふさわしい乳房だった。

道子

「では、測っていきますね」



メジャーを持つ手が震える。

震えにかこつけて胸に触れ、きめの細かさを確認する。

さほど手入れされていないものの、荒れているわけではない。
むしろ若さ故の鮮度の際立つ肌質で、しっかりと手入れすれば極上の肌触りになることは容易に想像できた。

この胸に決めよう。



その決意はまるで、家電量販店で少し大きな買い物をするときのような、期待と不安が入り交じった独特の感覚だった。

道子

「ちょっと肌が乾燥していますね」

アイドルを目指す少女

「そうですか？」

道子

「ええ、今は若いから良くて、先々後悔しますよ」

アイドルを目指す少女

「えっと、保湿とか？」

道子

「そうですね。せっかくだし、軟膏塗っておきますね」

私は震える手で軟膏を取り出す。

下着で持ち上げられた胸元が、今から自分の物になるんだと思うと嬉しくてたまらない。

効果が確実であることがわかっているとかえって緊張して、キャップを外す手が妙に震えた。

アイドルを目指す少女
「えっと……」

道子
「大丈夫、無添加でワセリンみたいな物ですから」



どんな顔をしていただろうか。
どんな顔をしているだろうか。

見せられないし見られない。

自分の利益のために、自身の欲求を満たすために若い子の身体を手に入れようとしているのだ。

醜いと思う。

こんな醜い欲求に抗うこともなく他者を差し出す私は、きっとひどく歪んだ笑みを浮かべているだろう。

道子
「はい、これでOK」

アイドルを目指す少女
「……ありがとうございます」

と、今回は変化はすぐに訪れた。
みるみるうちに少女の胸が縮んでいく。

体験版はここまでです。
続きは製品版でお楽しみください。

制作:charmswap

作者:master(From 吸収ド레인)
シナリオ:春巻き侍
イラスト:ひいろ